保育北九州

平成24年１月１日
発　　行　北九州市保育所連盟
〒805-0019　北九州市八幡東区
中央２丁目１－１
（レインボープラザ５Ｆ）
電話（093）661－2153番
発 行 人　平　沢　　茂
編 集 人　日　野　真　人

2012 166

〈写真提供 八幡西 支部〉

表紙 …… 1
視点・年頭所感 …… 2
視点・役員あいさつ …… 3
第30回九州私立保育園研究大会を終えて … 4～5
二人三脚 …… 6～7
第30回九州私立保育園研究大会 … 8～9
第49回北九州市保育研修大会・研修報告 … 10～11
雑感・編集後記 …… 12

TAP ROOTS!

響き つながり合った 想い出

視点

保育事業に経済界参入？

十二月四日（日）日経新聞朝刊の一面のトップに「第一生命が保育事業、今後の五年間で三〇ヶ所２５００人の受け入れ目指す。運営はＪＰホールディングス、ボピンズの二社に委ねる」とある。この日のＮＩＫＫＥＩ・ＣＮＢＣはこの件について「自社ビルの稼動率の向上を狙う他、子育て世帯向けの新保険商品の開発を検討、更には政府が規制を緩和する方針を実現すれば自前運営も検討するとし、生命保険事業が縮小傾向にある中、保育所を新たな収益源とする」とくり返し報じた。

嗚呼！保育園は子どもの育ちを支え、その幸せを目的とする場から収益を目的とする場となったのであろうか。

又十月十四日の週刊朝日「お代は見てのお帰りに」という連載頁に、小倉千加子なる心理学者が「学級崩壊の原因は何も教えない保育所にある」という文章が掲載された。

「設定保育」のみが教育であるとする「保育」という語に対する認識不足に「ぷりずむ１２５号」の拙文を添え編集部に抗議文と質問状を送った。

保育を経済活動と称して憚らず、又、就学前の独自性を無視し、学校教育を国は、新年に入ってこれを法制化し、近い将来に実施することをすすめようとしています。

そのような中にあって、北九州市保育所連盟は独自の働きをもって、また連盟が連なる九州保育三団体（日本保育協会九州地区連合会・九州私立保育園連盟・九社連保育協議会）が組織する「九州保育団体連絡協議会」の働きをもって、児童福祉法第二十四条を堅持する立場に立って、「保育」における国の責任を明確にし、直接契約、市場競争原理に委ねようとすることなどを含む現行制度を崩壊させるような「新システムの法制化」に対して強く反対を表明してきました。

本年もこれを継続していきます。この活動をすすめることは、決して容易なことではありません。しかし「子どもの最善の利益を追い求め、子どもたちの今を大切に」を念頭に、皆様の一層のご協力とご支援をいただいて、委ねられた役割を果たして参りたいと願っています。何卒、宜しくお願い申し上げます。

年頭にあたり所感の一端を申し上げ、本年の皆様のご健康とご健闘を祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。

年頭所感

北九州市保育所連盟
会長　平沢　茂

あけまして
おめでとうございます。

皆様にはお健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、三月十一日の東日本大震災と原発事故などによる大災害によって多くの方々が悲しみと苦しみに覆われました。寒さの中、あらためまして被災者の皆様へ、お慰めとお見舞いを申し上げます。

そのような中にも、「絆・見上げてごらん、夜の星を」の言葉で言い表されたように、人の熱い想いと行動が大きなつながりとなって日本中のみならず世界中を駆け巡り、正に人と人との絆の大切さとありがたさを思い知らされた一年でもありました。

一方、保育をめぐる情勢は、ここ数年来「子ども・子育て新システム」の法制化の議論に揺さぶられ続けてきました。

全国保育協議会の昨年九月五日の協議員会総会において（北九州市保育所連盟は反対の意を明らかにしましたが）、財源確保の条件を付して新システムの「中間とりまとめ」を受け入れる決議がなされました。

しかし、十二月十五日の緊急協議員総会においては、国の基本制度ワーキングチームによって、幼稚園は独立して継承され、私学助成を組み入れることなどの議論が浮上し、これに対しては反対の決議がなされるなど議論が錯綜しています。

上位とするような風潮を煽り立てる一連の動き中で、我々の所属団体は戦後六十年間積み上げて来た保育理論や、子どもの現在が日本の未来と信じて実践して来た子どもの育ちへの熱い思いを、何故説得力をもって人々の心に届くメッセージを発信しないのだろう。

「幼稚園に私学助成が上乗せされると、保育認定をさけ、幼稚園利用が進むことが予測される故に、今後検討の場には出ない。」とこぶしを振り上げた組織もあると聞き及ぶが、この主張では経済活動とさして変りはないではないか。

岐路に立つ時、何故立ち止まって、過去の歴史に学ぼうとしないのか。

子ども不在の経済効率ばかりが追求され、周産期からつながる発達の連続性や「大人からの世話と子ども自身の中にあるものの育成との調和」こそが重視される「保育」という語の成り立ちを忘れ去り、子どもの自発性を無視した教育の早期注入、能力重視がもたらした結果としての子どもの現状を最もよく知り、案じている保育当事者が声を大に警鐘を鳴らす時ではなかろうか。

一人の声は届かずとも「組織は力なり」である。大集会が自己満足に止まってはならない、世論にならねば意味がないことを痛感する日々である。

藤岡　佐規子

門司支部
支部長　西　敏昭
保育士会長　廣吉八重美

小倉北支部
支部長　酒井　光義
保育士会長　福田みつよ

若松支部
支部長　伊髙　繁男
保育士会長　萩野いくの

戸畑支部
支部長　内田りツ子
保育士会長　白井　洋子

辰

会長　平沢　茂
副会長　山本　文雄
北野　久美
伊髙　繁男
保育士会副会長　中村　尋子
黒田　玲子
猿渡佐知子
顧問　西村　賢了
西村　良樹
藤岡佐規子
深川　信教
北野　一恵

本年も宜しく
お願いします

小倉南支部
支部長　橘原　淳信
保育士会長　山崎　啓子

八幡西支部
支部長　山本　文雄
保育士会長　西澤　満子

八幡東支部
支部長　杉園　弘充
保育士会長　岡本エミ子

『第30回九州私立保育園研究大会（北九州大会）を終えて』

大会は平成二十三年十一月十七日（木）～十八日（金）に、リーガロイヤルホテル小倉を会場にして行われました。成功裡に終わった大会について、大会実行委員長の橘原淳信北九州市私立保育園連盟会長にお話を聞かせていただきました。

聞き手・保育北九州編集委員（以下、編集A～D）
語り手・橘原淳信実行委員長（以下、橘原）

（編集A）九州私立保育園研究大会〈北九州大会〉お疲れ様でした。実行委員長として終わるまでは緊張の連続だったと思います。振り返ってみて何が一番印象に残りましたか？

（橘　原）やはり参加者の保育にかける熱気ですね。

（編集B）約一一〇〇名もの参加者の熱気凄かったですね。「ようこそ北九州へ」との歓迎の声と、「楽しみにしていました」「お久しぶりです」との参加者の声が重なって、開始前からエキサイティングな大会になりそうな雰囲気でした。

（橘　原）十一月十四日に日比谷公会堂にて行われた「子どもの育ちと保育制度を守る全国研修会」に九州から一四〇〇名もの参加者がありました。そしてすぐに行われた北九州大会でしたので、参加者数が心配されましたが、そんな杞憂を吹き飛ばす参加者数でした。そして、すぐに始まった分科会では、発表者やシンポジストたちの丁々発止のやりとりに参加者も加わっていき、まさに実践研究の場でしたね。

（編集A）用意したはずのイスが足りなくなった分科会もあると聞きました。間違いなく、申し込み人数分のイスを用意していましたよね……？　わたしも事前にしっかりと確認していたのですが……。

（橘　原）第一分科会のことですね。どうやら、分科会の掛け持ちをされていた先生がけっこういらっしゃったようです。わたしも途中で様子を見に行っていたのですが、座る席がありませんでした（笑）

（編集B）第一分科会は喫緊の課題である新システムについてのシンポジウムということで、聞かずにはおられなかったのでしょうね。

（編集C）第一分科会の会場にはNHKのテレビカメラも入り、社会的にも注目された大会だった思います。その日の夕方のニュースで大会の様子が放映され、それを見た保護者から、「先生たち頑張ってますね」との反響がありました。

（橘　原）長い歴史を持つ研究大会です。先達が作り上げてきた歴史と伝統に恥じぬよう、大会準備を行ってきた北九州の保育者全員が、成功を願っていました。

（編集D）準備段階から「保育は北九州から」を合い言葉に、北九州の保育者が全員で助け合いながら、緻密にそして大胆に構築した大会だったと思います。

（橘　原）今大会のテーマである「生命（いのち）のつながり　家族の絆～誰がまもる　子どものいのち～」を具現化できるよう、御講師の先生やシンポジスト、そして発表者やコーディネーターの人選を進めてきました。

（編集E）御講師の先生といえば、記念講演の御講師である浜美枝さんが、懇親会のアトラクションであるバナナの叩き売りに飛び入りで参加してくださって、叩き売りの口上を述べるや、「買った」「買った」の声が響き渡って、浜美枝さんのもとへ参加者が殺到しましたね。浜美枝さんはそんな状況でもいやな顔一つせず、微笑みを浮かべて記念写真に一

緒におさまってくださいました。大盛上がりの懇親会でした。

（橘　原）バナナの叩き売りの売り上げは東日本大震災で被災された方々の義捐金とさせていただきます。

（編集Ｆ）記念講演でも浜美枝さんは、講題を「生命（いのち）のつながり～今、私たちにできること～」とされて、孤立化・核家族化する家族の姿に警鐘を鳴らされていました。幼少期の子どもたちの育ちにとって、保育関係者の支援はとても心強い応援団だとも言われていました。

（橘　原）そう言う意味では、基調講演において「子どもの貧困から保育を見つめ直す」と題して講演してくださいました大井琢氏も、子どもたちの育ちに対する新システムの問題点をはっきりと明示してくださいました。

（編集Ｇ）基調講演の副題を「新システムの保育制度では子どもの貧困は悪化する」とされたように、わたしたちが一番に目を向けるべきは、子どもたちの育ち、そして未来なのだと教えていただきました。

（編集Ａ）全体会において承認された大会宣言も力強いものでした。わたしは、全九州の保育者の熱意と情熱を感じました。

（橘　原）今大会は、九州の私立保育園関係者だけが話しあい学びあう、閉じた大会ではありません。九州以外、東京や広島からも参加者がお見えになっておられました。全私保連からも会長の近藤適先生にご列席いただき、常務理事の平野弘和先生には第一分科会のコーディネーターを務めていただきました。そして大会宣言は、広く社会へと発信されていくものであると考えています。

（編集Ｂ）今大会は外部への発信の場でもあったのですね。

（編集Ａ）これが大きなムーブメントになってくれることを願っています。

（橘　原）閉会式が終わって、みんなで参加者を見送りました。そのとき参加者のみなさんが「お世話になりました、次は熊本で会いましょう」と口々におっしゃっておられたことも嬉しかったですね。

（編集Ｃ）今大会で終わりではない。次へと繋がっていくのだ、ということが実感できた大会でもありました。

（編集Ｄ）わたしは来賓の方から「北九州のおもてなしの心に感激しました」との言葉をいただきました。

（編集Ｅ）みんなで力を合わせて大会を成功させることができて本当に嬉しかったです。大会準備で、地元であってもふだんはなかなか話す機会のない先生方と語り合うことができたのも良い思い出です。

（橘　原）そうです。参加者だけではなく地元の保育関係者との交流も、大会の醍醐味です。大会準備は一年かけて行いました。その間の大会役員の熱心な協議や、成功させたいという思いは計り知れないものがありました。これも北九州市私保連の結束を内外に示すことが出来たよい機会であったと思います。また、ふだんは縁の下の力持ちに徹している保連事務局のみなさんの活躍も、記しておかねばならないことだと思います。

（編集Ｆ）また機会があれば、北九州で大会をやりたいですね。

（橘　原）「保育は北九州から」を合い言葉にこれからも皆で研鑽を積んでいきましょう。

平成二十三年十一月二十八日
レインボープラザ５Ｆ
保連会議室

北九州市保育所連盟
㈳北九州市私立保育園連盟へご寄付

八幡西区　浅川保育園
　園長　上原　剛　様より
　前園長　上原　正靖　様
門司区　白野江保育園
　園長　藤富　孝雄　様より
　前理事長　藤富　真行　様
のご逝去に伴い、保育事業発展のため多額のご芳志を頂戴いたしましたので、ご報告申し上げますと共に心からご冥福をお祈り申し上げます。

北九州市保育所連盟
㈳北九州市私立保育園連盟
北九州市保育士会へご寄付

小倉南区　きくが丘保育園
　園長　藤上さや子　様より
　前主任保育士　藤上美代子　様
小倉北区　れんげの花保育園
　園長　黒田　幸裕　様より
　前理事長　黒田　和子　様
のご逝去に伴い、保育事業発展のため多額のご芳志を頂戴いたしましたので、ご報告申し上げますと共に心からご冥福をお祈り申し上げます。

『二人三脚』

杉園 弘充 支部長

岡本 エミ子 保育士会長

ファイルNo.2
八幡東支部

好評連載の「二人三脚」第二回目は、ご兄妹でいらっしゃる八幡東区支部長　杉園弘充先生、同保育士会会長の岡本エミ子先生に、それぞれの保育園で保育北九州編集委員が平成二十三年十二月一日に、お話を伺ったものを編集して掲載いたします。

聞き手・「保育北九州」編集委員（以下・編集）
話し手・高見の森保育園
園長　杉園　弘充（以下・杉園）
話し手・杉の実保育園
園長　岡本エミ子（以下・岡本）

（編集） 宜しくお願いします。まず最初の質問ですが、保育の仕事に就かれたきっかけは何でしょうか。

（杉園） もともと新日鉄に勤めていたのですが、五十四歳の時に椎間板ヘルニアの手術を受け三ヵ月ほど休職をしました。その間に将来を考えました。

（編集） そして保育の道を選ばれたのですね。

（杉園） 当時、病気がちだった父親の跡を継ごうと、会社勤めから保育の道へ、180度方向転換することにし、用務員をしながら社会福祉研修センターへ保育の勉強に行きました。保育者としての親の後姿を見ていましたので、全く知らない世界ではありませんでした。

（岡本） 大学卒業後、児童相談所に勤めていた頃、定年を迎えた父の「教育的な仕事をしたい」との思いから、杉の実乳児保育園の設立となりました。そしてそれに続く神田杉の実保育園の開設にあたり、勉強をし保育士の資格を取りました。保育園ではクラス担任と主任保育士を兼任しながら研修を受け、社会福祉主事の資格も取りました。

（編集） お父様は教育熱心だったのですね。

（岡本） 子どもの頃、「お父さんのお仕事は?」と聞かれると「PTA会長です」と答えていました。

（編集） この道に進んで良かったと思うことや、園長冥利につきると思われる時はどんな時でしょうか?

（杉園） いろいろなことを学びたいと思い、アメリカへ保育所視察に参加しました。ですが、あまり参考にはなりませんでした。かえって日本の保育の素晴らしさに気づかされました。

（岡本） 園長冥利かどうか分かりませんが、以前は自分の保育に対する考えを伝える時は三年計画でした。少しずつ理解してくれ、今では職員が率先してやってくれるようになりました。

（編集） 休日はどのようにお過ごしですか?またストレスの発散方法も教えてください。

（杉園） 趣味は沢山あります。ゴルフもしていましたが、最近は岸壁でアジ釣りを。釣った魚は自分でさばきますが、家族

は迷惑しているようです。あとは夫婦で旅行かな。29ヶ国行っています。

（編集）一番お好きな国はどこですか？

（杉園）ドイツですね。あとハワイは、気候がよく食べ物も豊富で言葉も通じやすいのでとても楽な所だと感じます。そう、実はわたし鉄道マニアでもあるんです。鉄道模型も沢山持っていますし、各地にある鉄道博物館は何箇所も回りました。

（岡本）わたしは、休日は出来るだけ体を休めるようにしていますが、たまには姉や友人と国内外の旅行に出かけたりもします。その他にも、専門学校や短大で児童福祉の講師をしていますので学生との交流も楽しんでいます。学生に教えると自分の勉強にもなるんですよ。

（編集）ご兄妹で支部長、保育士会長務めていらっしゃって息が合うと思われる事はありますか？

（杉園）ないない（笑）。つい、はっぱをかけてしまっています。

（岡本）基本的には意識しないようにしています。でも外部からは、「やっぱり兄妹ね～」と言われる事もあります。

（編集）お二人の座右の銘はなんでしょうか？

（杉園）〝人事を尽くして天命を待つ〟です。しかし、入社の時そう書いたら「そんなのんきな事ではだめだ」と言われた事を思い出します（笑）

（岡本）〝今日出来ることを今日する〟です。十年前脳出血を患って以来、自分の体は自分で守ろうと通勤は歩くようにしています。

（編集）お二人には意外な一面もあるとお聞きしております。

（杉園）わたしは畑を耕し野菜を作るのを楽しみにしています。日々、手間隙かけて大事に育て、その成長を喜ぶ、保育にも通じることだと思います。

（編集）岡本先生はいかがですか？

（岡本）こう見えて私はのんびりやなんです。最近は忘れっぽくなり眼鏡等もバッグに入っているのに探したりしています。

（編集）とても雄弁に様々なことを語って下さった支部長、学ぶことが大好きな保育士会長。これからもお二人で八幡東支部を支えてくださる事でしょう。本日はどうもありがとうございました。

およろこび

☆全国私立保育園連盟会長表彰

高須保育園　園長　植山敏泰
白鳩保育園　前園長　中村美加恵

☆厚生労働大臣表彰

東篠崎保育所　所長　高原美由喜
深町どんぐりのもり保育所
所長　吉岡優子

☆全国保育協議会会長表彰

古前保育所　所長　萩野いくの
八幡東さくら保育所
所長　深堀和枝
三ツ葉保育園　園長　藤井英和

☆西村法昭顕彰会表彰

到津乳児保育園　園長　内藤典子

第30回　九州私立保育園研究大会（北九州大会）

この研究大会は去る十一日十七・十八日の両日、リーガロイヤルホテル小倉に約千百名の参加者が集い開催されました。

以下、その概要をお知らせします。

基調講演

「子どもの貧困から保育を見つめ直す」

―新システムの保育制度では子どもの貧困は悪化する―

講師・弁護士　大井　琢氏

弁護士の立場で「子どもの貧困」という視点から「保育」「新システム」について話された。

「子どもの貧困」とあえて取り上げるのは、①子どもの安心・安全な生活　②子どもの成長・発達する機会が十分に保障されていないことを明確にするためで、「子どもの貧困」は、子どもの権利保障と直結。

子どもの安心・安全な生活と成長・発達する機会を保障することは、子どもと社会にとっても意味のあることで「保育」は、このことを保障する営みとして長年築き上げられ「子どもの貧困」を食い止める重要な働きをもっている。

そして今、国がすすめている新システム…直接契約・利用者補助制度は、子どもにメリットはなく、指定制は、お金をかけずに保育施設を増やそうとしており、幼保一体化は、保育を軽視し、教育を誤解していて待機児童解消策にはならない、と語られた。

記念講演

浜美枝氏

女優・司会・パーソナリティとして幅広い活動されるとともに、現在農林水産省などにおける各審議会委員として「農・食・文化の継承」について積極的な実地活動を展開中の浜美枝氏による「生命のつながり～今、私たちにできること～」をテーマとした講演が開催された。

浜美枝氏の原体験は、幼少期における自然の中での育ち、そこでの祖母から学んだ事だった。それは、自分の子育てに活かされたと語られた。誰かに教えてもらうのではなく、生活する中で自ずと身につけることが大事であり、また自然の中で親子の会話を楽しむ事も大事だったと語られた。そしてそのことが子どもの創造力を豊かに広げ、思いやりの心を育てることに繋がったそうだ。浜美枝氏の子育ては自然を介し、子どもから孫へと繋がっていくこと「家族・親子の絆」を願う子育てと話された。また、これからの時代に必要なことは「母親力」と子どもの育ちである。「命のつながり――絆」であり次世代に胸を張って、誇れるものを伝える事が大事であると思いを述べられた。

幸せな食事を家族と囲んで「いただきます・ごちそうさま」を言い続けていく事は、相手の立場を思うことに繋がっていく。だからこそ、子育ては命の重みや思いやりの心を育むことだと気づかされた、と話されていました。これからも自分に出来る事と子どもの幸せを考えていきたいと講演を締めくくられた。

第1分科会

参加者数　三百四十三名

「新たな子ども・子育てシステムを考える」

コーディネーター・全私保連常務理事　平野弘和氏

シンポジスト・大阪市立大学教授　山縣文治氏

福島大学教授　大宮勇雄氏

保育園を考える親の会代表　普光院亜紀氏

北九州市保育所連盟前会長　藤岡佐規子氏

コーディネーターの平野氏の「子どもの育ちを支えるとは」「そのための望ましい子ども・子育てシステムのあり方」という二段構えの議論内容の説明より始まり、シンポジストの四名の先生方の新システムのあり方、ワーキングチームへの問題提起、意見発表がなされました。内容として新システムの課題、保育の市場化、児童福祉法二十四条の後退、保育の質の確保について意見を頂きました。意見交換の討議では、四氏の児童福祉法二十四条の解説と保育の計画的整備の活発な意見討議が行われました。会場からのアンケート回答では、保育士雇用、財源問題、公的契約の意味など新システムに関わる問題を中間取りまとめ案に準じて、回答が示されました。まとめとして今後のワーキングチームの動向を見て子ども達の視点に立って新システムを議論していく、と締めくくられました。

第2分科会

参加者数　二百五名

「保育指針に基づく主体的な保育の振り返り」

助言者・西村真実氏

大阪成蹊短期大学　講師

発表者・筑紫ヶ丘保育園（福岡市）

まくらざき保育園（鹿児島県）

小倉北ふれあい保育所夜間部（北九州市）

三名の発表者により、さまざまな保育の振り返りの方法と工夫を園長や主任の立場から提案発表された。主担任会議、絵画の活用、園内研修システムの構築など多岐にわたり、バラエティーに富んだ発表だったが、共通していたのは、いかに効果的に保育士自らが伸びる力を支えていくかという視点だった。その後、園長・副園長、主任・副主任、保育士に分かれ、テーマに沿ってグループ討議を行った。参加者は活発な意見交換を行い、意識関心の高さが

伺した。講師の西村先生より、保育の質は保育指針に基づく「計画」「実践」「評価」「改善」の循環によって高められるものであり、保育所の組織性や職員の専門性が高められる、との話があった。子どもの最善の利益の為に、保育指針に基づく保育実践を振り返り、保育の質の向上をめざしていくことを学びあった。

第3分科会

参加者数　二百六名

「発達をつなぐ保育のあり方」

助言者・帆足暁子氏
ほあし子どものこころクリニック　副院長

発表者・世知原保育園（長崎県）
くほんじ保育園（熊本市）

二園から「気になる子についての課題と今後の取り組みについて」「記録を通しての支援を考えるために一〇〇日記録の実践」の発表があった。二園ともに共通して難しい問題が、保護者にどのように伝えていくかという点であった。グループ討議において保護者への支援方法・専門機関との連携・記録する上での問題点、職員・小学校・地域との連携方法など、活発な意見交換がなされた。

帆足先生より、二園の発表・質問をふまえて講演があった。

・子どもの発達は個人差があるので、発達段階が何歳レベルであるか確認することが必要であり、記録は方法手段である。
・子どもは「愛着」の成立した人からいろんな事を学んでいく。
「先生大好き」と子どもから言われるように、かかわることが大切である。

最後に、子どもに実践したことは、その場で効果が出なくても、小中学校で表れてくると締めくくられた。

第4分科会

参加者数　八十二名

「地域につなげる子育て支援」

助言者・太田光洋氏
和洋女子大学　教授

発表者・赤間保育園（福岡県）
桜山保育園（熊本県）

第一発表者は〝歌を通して豊かな感性を育む保育〟という保育方針の一環として始めた「フレンドリーコンサート」について発表があった。園児と保護者、卒園児、地域の方々と音楽を通して絆を深めていった、というものだ。第二発表者からは〝地域のオアシス〟に基づき「ホスピタリーマインド」の精神を支援の中に活かしていく事が子どもや家族の幸せに繋がっていくという事例発表があった。太田先生から、支援の大切さとして、利用する人にとっての使いやすさを考え、見えない親と子どもの声を掘り起こしていき、見えない要望、気付かない要求に気付いていく事が大切との助言をいただいた。太田先生は幸せ感は人と人との繋がりで感じる、と締めくくられました。

第5分科会

参加者数　百七名

「食でつなぐ育ちの輪」

助言者・堤ちはる氏
日本子ども家庭総合研究所
母子保健研究部・栄養担当部長

発表者・上江保育園（宮崎県）
すみれっ子保育園（沖縄県）

午前中は「食べるって楽しいね（宮崎県）」「食べたい物、好きな物が増えていく子ども（沖縄県）」をそれぞれの園の目標とし、栽培、収穫、クッキングの体験を通し職員から子ども、子どもから家庭、地域へと食の輪が広がり「食」への興味関心が高まってきたという実践発表があった。

午後は「保育園・家庭・地域への連携」「調理室・保育室との連携」を柱とし、熱心なグループ討議が行われ、最後に日本子ども家庭総合研究所　母子保健研究部・栄養担当部長の堤ちはる氏より「今、改めて食育を考える」①調理、栽培活動等は手段の一つであり最終目的ではない②保育所の食育は「食を営む力」の基礎を培うこと③生活全体を通して食育実践が必要④食育を保育の内容の一環として位置付けることが重要⑤身近な保育士がまず「食」への興味関心を持つこと⑥「バランス感覚」を身に付ける食育が求められる。以上の内容で講義があり、食育の現状と問題点について学んだ。

特別分科会

参加者数　八十八名

見学施設は、シャボン玉石けん・環境ミュージアム・いのちのたび博物館・高見の森保育園・元気の森でした。参加者が特に興味深そうだったのは、やはり高見の森保育園のようで、案内者に次々と質問をしながら施設内をじっくりと見学していました。シャボン玉せっけんでは、浴用石鹸や歯磨きの製造現場を見学しました。石鹸と洗剤の違いについての話や、洗剤を購入する際には成分表をよく確認すると良いでしょうなどの話がありました。また、蛍光増白剤を含む合成洗剤で洗濯されたシャツがブラックライトに照らされ発光する様子に参加者は皆驚いていました。

懇親会

祇園太鼓のオープニングで参加者を迎えました。来賓の皆様と主催者役員が一緒になっての鏡割りへと続きました。そして元全私保連会長西村良樹先生御発声による乾杯でいよいよ懇親の場が盛り上がります。威勢の良いバナナの叩き売りが始まりました。参加団体から1名ずつ代表を出してバナナの叩き売りの実演が始まりました。そこへ記念講演御講師の浜美枝さんが飛び入り参加してくださって、場は大盛り上がり。売り上げは東日本大震災への義捐金とさせていただきます。各テーブルでは笑顔で歓談する仲間たちの輪が広がっていました。保育関係者の絆の強さをあらためて感じました。

記念式典

九州私保連副会長本村憲裕先生の開式の言葉で始まりました。まず東日本大震災でお亡くなりになった人々、そして子どもたちや保育関係者へ一分間の黙祷が捧げられました。続いて児童憲章の朗読、並びに全国私立保育園連盟基本綱領の朗読が行われました。そして九州私保連会長玉城善徳先生の主催者挨拶、並びに本大会実行委員長橘原淳信先生の歓迎の挨拶へと続いた。その後、来賓を代表して北橋健治北九州市長の祝辞を副市長に代読いただき、全私保連会長の近藤適先生からもご祝辞を頂戴いたしました。続いて祝電が披露され、九州私保連副会長吉田雅信先生の閉式の言葉となりました。

閉会式

主催者が壇上に集合し、本大会実行委員長が、皆様のご協力により無事大会を開催できたことへのお礼を申し述べた。そして次回開催熊本県が盛大な拍手をもって承認され、熊本県のゆるキャラであるクマモンが会場を大いに沸かせた。最後に、本大会実行委員全員による見送りの中、参加者の皆様はそれぞれの思いを胸に会場を後にして行かれた。

第49回　北九州市保育研修大会

この研修大会は去る十一月二・三日の両日、アルモニーサンク・ソレイユホールに約二千名の会員が参加して開催されました。以下、その概要をお知らせします。

第一日目　施設長特別研修会

行政説明

北九州市の保育行政について

子ども家庭局子ども家庭部保育課
課長　武田信一

北九州市子ども家庭レポートにそって、現状と課題及び今までの主な施策の実績の報告がなされた。次に「元気発信！子どもプラン」に基づく説明が行われ、子育て日本一を実感できるまちの実現を目指すと締めくくられた。

講演

子ども・子育て支援の現状と課題

厚生労働省 雇用均等・児童家庭局
少子化対策企画室長
黒田秀朗氏

厚生労働省の最近の保育の現状と課題の調査結果において、少子化の流れ、待機児童の状況、地域差の顕在化の公表の説明があり、総合的な取組の必要性と量的拡充及び地域社会の基盤としての保育をどう確保していくか課題が示されました。今後の議論で内閣府のワーキングチームの議論予定が述べられ、社会保障一体改革等について話されました。

第二日目　本大会

基調報告

―保育の道の行方―
「新システム・中間とりまとめ」に思う

北九州市保育所連盟
会長　平沢茂

新システム・中間とりまとめが発表された。子どもは社会の希望であり、未来をつくる力であるが、未だ内容については「検討」とされた文言が多くあり、子どものためとは思えない制度である。保育を必要とする人が、優先的に利用でき、発達の連続性が確保され、保育の内容に差別化がないような制度であるべきである。最後に平沢先生は、保育の道はけわしいけれど、反対すべき事はしっかりと心に力をこめて訴え続けていきたいと語られた。

新システムについて
現場の視点・子どもの視点

北九州市保育士会
会長　北野久美

「新システムについて、感じていることをいっしょに考えましょう」という呼びかけから始まった北野久美保育士会会長の熱い講演は、あっという間の一時間でした。たくさんの資料を駆使しながら、どことなく遠く感じていた事を現場目線で噛み砕いて語ってくださいました。

新システムでは、先達から脈々と受け継がれてきた〝子ども達の発達の連続性を保証してきた〟保育、保護者や地域との連携などは一般企業の参入でますます保障されづらくなるであろう、保育士の処遇、それらに伴う細切れの保育、食育とかけ離れるのではないかと心配される給食、本来とは質の違うものになるであろう園長の責務。なにより、子ども達の豊かな育ちは保全されるのだろうか、今後の検討として積み残された課題は、等々不安や疑問は尽きません。北野先生は、「私たちは子どもの代弁者であり、社会保障はコストではなく未来への投資であると考えます。今後の動向に注目しながらも、今のシステムの良い個所を守りつつ、薄いところを厚くしたものが望ましいのでは、と主張すべきところは声をあげましょう」と結ばれました。短時間では語りつくせないような内容を丁寧にご説明いただきました。今後とも私たち全員で考え行動していきましょう。

記念講演

保育環境のデザイン
～遊びによってもたらされる能力とそれを育む環境の関係～

㈱　環境デザイン研究所
会長　仙田満氏

「子どもにとって必要な環境はどのようなものか」と、建築家の目で見た子ども環境作りを行っている。

子どもの遊びの条件は、自由であること・楽しいこと・無償であるこ

と・繰り返されることである。子どもにとっては、遊びは生活そのものである。遊びで開発される能力は、身体性（体力がつく）・社会性（コミュニケーションがとれる）・感性（豊かな感性が育つ）・創造性である。子ども達が、集団で遊ぶ中でケンカや仲直りをする。それは大学ではなく保育園の砂場で学ぶのだ。また、あそびを通して困難に立ち向かう強さが育つ。

現在、日本の子どもの遊びはテレビの普及により外遊びが減り、自然遊びの経験が少なくなっている。遊びを教える人も減り、子どもの遊びに対する意欲も減ってきた。視聴覚情緒がいくらあっても、体で学習をしていないので運動能力は低く、体を巧みに動かすことができない。色々な遊びを子どもに経験させる為に、遊び場と遊びを教える人（プレイリーダー）が必要になる。

今現在、子どもが元気に育つまちづくりを目指し、東日本大震災復興プランに携わっている。子ども達が心も体も大きく成長し、皆で助け合い乗り超える力を次世代につなげていけるように支援している。「絆」という名の下で。

研修報告

第45回全国保育士会研究大会（鹿児島）

「子どもが豊かに育つ保育の実現～子どもの心を育てよう～」をテーマに十月二十日～二十一日、鹿児島に於いて大会が開催されました。記念講演では、全盲の歌手でピアニストでもある北田康弘氏の〝心の瞳で物事を見つめる〟ことの大切さや〝音楽を通して人の悲しみや喜びに共感できる感性を育てる〟という熱いメッセージはとても心に響きました。二日目の分科会では、「気になる子どもへの保育」に参加させて頂き改めて子どもの気持ちを受け入れ寄り添い、その子どもにあった保育を見出していく事が大切だと感じました。今回の研修で得た事を生かし専門性を磨いていけるよう努めていきたいと思います。

古前保育所　森内由紀

第49回北九州市保育研修大会

平成二十三年十一月二日・三日に第四十九回北九州市保育研修大会が開催されました。施設長特別研修では武田保育課長より市の保育行政説明、厚生労働省少子化対策企画室黒田室長より「子ども・子育て支援の現状と課題」について講演がありました。

二日目の全体会では、「保育の道の行方―新システム中間とりまとめに思う―」をテーマとした平沢会長の基調報告と北野久美会長より「現場の視点・子どもの視点」で、新システムについてのお話がありました。

共通する事柄について、それぞれの立場の先生方からお話を聞くことができ、子どもを取り巻く現状と課題・新システムの中間とりまとめの内容について理解を深める事ができました。同時に、新システムは、まだ検討中の箇所が多く、子どもの育ちを中心に置いたものになるよう、今後も動向を注視していかなければと、実感しました。

午後は、記念講演「保育環境のデザイン―遊びによってもたらされる能力とそれを育む環境の関係―」をテーマに環境デザイン研究所仙田満会長の講義がありました。子どもの発達にとって、遊びがどれ程大切であるか・取り巻く環境がどれ程大きな影響を与えるか。遊びを発展させる遊具や空間作りの工夫・安全への配慮など、多くのことを学びました。

堂山保育所　髙辻素子

第30回九州私立保育園研究大会

十一月十七日、十八日に行われた大会に参加させていただきました。「発達をつなぐ保育のあり方」の分科会に参加し、記録の大切さを改めて感じました。記録を書くことで子どもや保護者の姿が見えてくる。それが手立てとなり、信頼関係につながるとともに、自分の保育を振り返ることができるとわかりました。

助言者の先生が、「先生大好き」と子どもから思われる保育者になること、プロとしてあきらめない気持ちで子どもに関わることの大切さを話されました。《初心に返る》ことのよい機会となり、学んだことを日々の保育の中で生かしていきたいと思います。

金田保育園　下條陽子

雑感　『「ぎゅっと」抱きしめて』

保育園ごっこをして遊んでいる場面で、先生役の子どもが「大きくなったら何になりたいですか?」と言っているところに遭遇しました。子ども役の子は「大きくなったら保育士になります」と話していました。私も幼い頃、一緒に遊んでくれた優しい笑顔の先生が私を「ぎゅっと」抱きしめてくれたことを思い出しました。困っていると「どうしたの?」、とそばに来て膝の上にのせて話を聞いてくれた、とても温かくふんわりとした心地良さを今でも覚えています。その後、幼い頃の夢が叶ってあこがれの保育士になりました。しかし現実は夢で描いていたのとは違い、自分の任された仕事をこなすだけで、精一杯でした。そこからが本当の意味での保育者人生の始まりだったと思います。実際の保育現場を経験することによりいろんなことを学びました。特に保護者との関係や子どもの怪我トラブル等など、命を預かる保育士という仕事の重みを痛感しました。オムツを替えるだけで、うまくいかず涙が出たあの頃。しかし経験を重ねることでさらりと出来るようになりました。中堅と呼ばれる頃になると、保護者への対応の仕方や職員間の連携もスムーズにできるまでになり、心にゆとりが持てるようになりました。その頃ふと気づいたことがあります。私にできることは、子どもたちに安心できる居場所をつくってあげることなのではないかということです。園長となった今では、子どもと一緒に水やりをしながら一人ひとりにゆとりをもって接し楽しい会話も生まれています。「どうして?」「なんで?」「大きくなったね!」「見てみて!」、と子どもたちの不思議・疑問・気づきに受け答えすることが朝の始まりとなっています。この会話を「ぎゅっと」抱きしめることと同じくらい心地よく思っています。また登園時と降園時に必ず子どもたちが、「ぎゅっとして」と笑顔で私の腕の中に飛び込んできます。しかし近頃では年長児に「お仕事がんばってね」と励まされ、「ぎゅっと」されることもあります。幼い頃、「ぎゅっと」してもらったあのふんわりやわらかな気持ちを、いま反対に子どもたちからもらっています。おかげでまた頑張ろうという気持ちになります。私の原点は、幼い頃に自分が感じた「ぎゅっと」抱きしめてもらうことの居心地良く安心できる気持ちです。それをこれからも子どもたちに伝え続けてあげたいと思います。子ども達が「ぎゅっと抱きしめられたこと」を大人になっても覚えていてくれたら、保育者冥利に尽きることでしょう。

牧山保育園　井上　清美

編集後記　――ありがとうカード

医師の鎌田實さんの病院では「ありがとうカード」という物を作って、看護師さんの間でやりとりをされているそうです。病院ですから深夜であっても救急外来から患者さんが搬送されてきます。受け入れる側の病棟の看護師さんは、深夜でも大変忙しくされていますから、それに輪をかけた状態となる救急受け入れに、「なんで自分たちの病棟に」と愚痴や不満を漏らしたくなるのもある意味当然でしょう。しかし、患者さんにとって一刻を争う場面です。看護師さんたちは「わたしたちに任せて」と愚痴や不満はグッとこらえて、患者さんの為に一生懸命尽くします。受け入れてもらった救急外来の看護師さんたちはどんなにホッとすることでしょうか。ですから翌朝、救急外来から受け入れ病棟へ「ありがとうカード」が送られてくるのだそうです。看護師さんと保育士さん。どちらも命を預かる尊い職場です。わたしたちもカードという形はとらなくとも、保育の仲間同士「ありがとう」の気持ちのやりとりをしていきたいですね。

「保育北九州」編集長　日　野　真　人